8. 大塚古墳（竜丘単位群）

所　在　地	飯田市竜丘桐林	
立　　地	標高430m　　地形区分－下段（C地形）	
墳　　丘	前方後円墳	主軸方向－N50°E 墳丘全長－現状50m（推定53m）　　高さ－後円部7.5～9m・前方部削平
	前方部はほぼ削平されているが、後円部は墳丘表面は改変されているものの、形状は比較的残る。現状の地割からみて、平面的には本来の形状を残している可能性が高い。	
墳丘外表	葺石	墳丘上に葺石とみられる石が確認できる。
	埴輪	埴輪は出土しているが、表彩であることから、配置は確認できない。 ○円筒埴輪・形象埴輪片（水鳥頭部・家形埴輪他）（文①②）
埋葬施設	竪穴式石室（推定）	『下伊那史』（文①）によると、後円部にある大石の存在から竪穴式石室があるとされる。
	『下伊那史』（文①）の記述にもあるとおり、後円部の墳頂部付近に大石が残る。しかし、現状では埋葬施設の存在を確認することはできない。	
外部施設	周溝	未調査であるが、周囲の水田区画から周溝の範囲が想定される。
出土遺物	○五鈴鏡（文②）	
調査履歴	『下伊那史』第2巻	墳丘形状、石室の存在、埴輪の出土
	1999年度	墳丘測量調査実施
築造時期	古墳時代中期（5世紀後半）	
特記事項	●後円部は残存するが、前方部は削平され、低い平坦地が残るのみである。未調査であるが、平面形状や地割等から、墳丘及び周溝の範囲が想定できる。	
	●五鈴鏡は、削平された前方部から出土したもの。	
	●埴輪には、円筒埴輪のほか、水鳥形埴輪、家形埴輪他があり、多種類の形象埴輪が存在する可能性が高い。	
	●本古墳を挟んで、南西側には兼清塚古墳、北東側には丸山古墳がある。3基の前方後円墳は近接しており、連続して築造されたものと考えられる。特に、大塚古墳と兼清塚古墳とは、周溝を接するような位置関係にある。	
	●上記3基は、塚原古墳群を眼下に見下ろすような位置にあり、塚原古墳群に先行する古墳であると考えられる。	
主要文献	①　下伊那誌編纂会　1955　『下伊那史』第2巻･同第3巻	
	②　飯田市教育委員会　2007　『飯田における古墳の出現と展開』	
	③　飯田市教育委員会　2012　『飯田古墳群』	

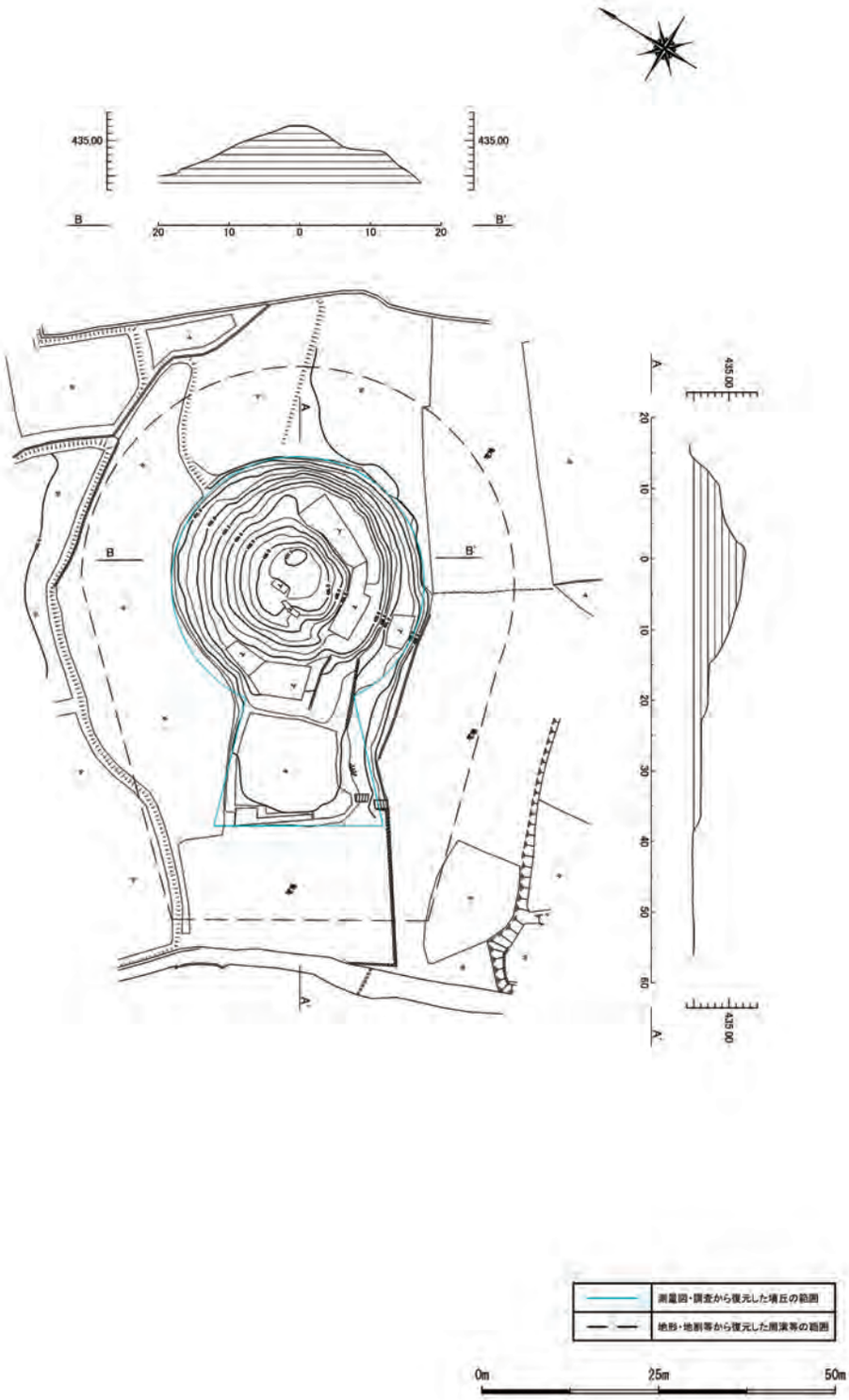
8. 大塚古墳（竜丘単位群）

古墳全景（西側より）

水鳥形埴輪

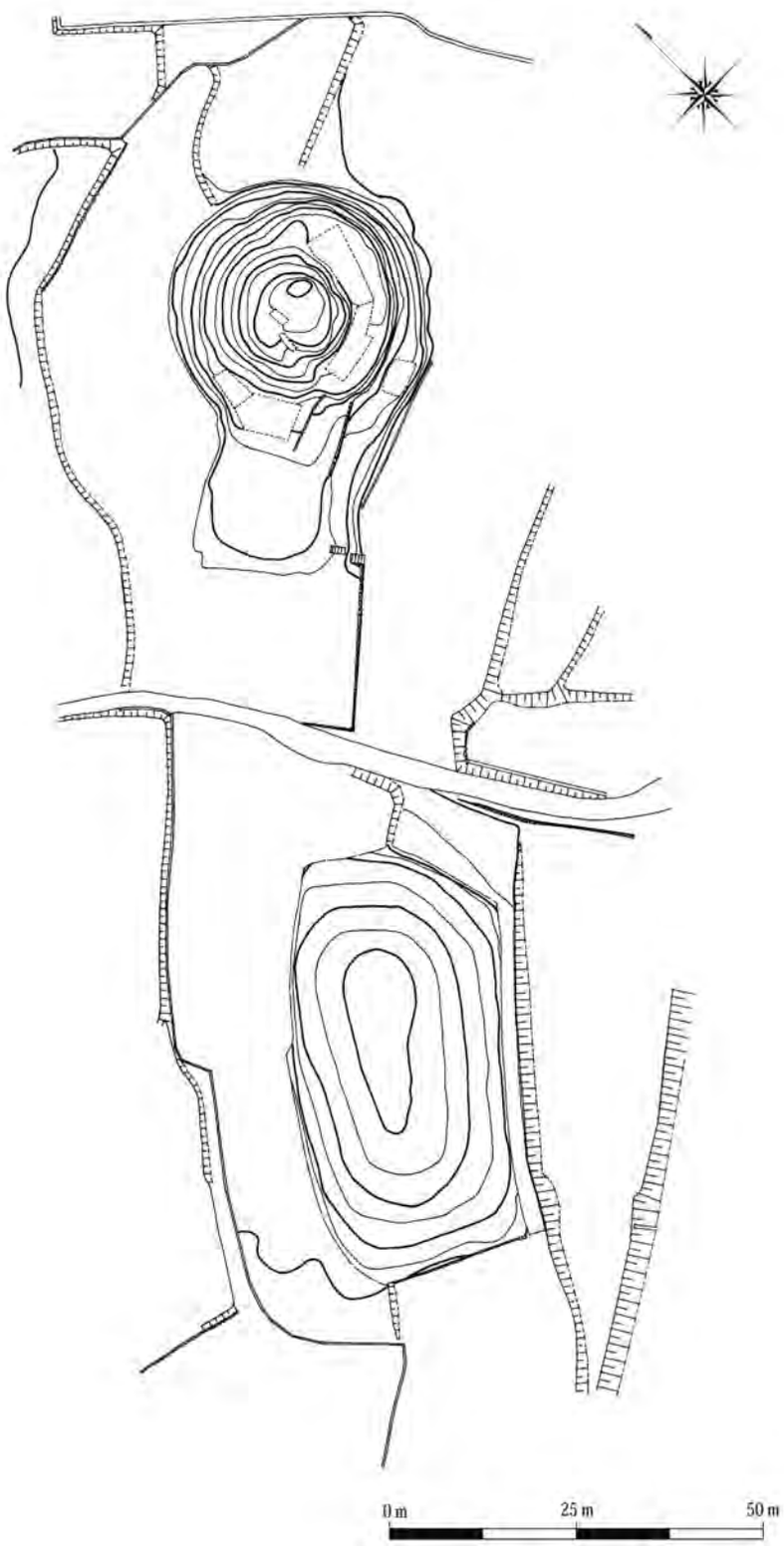
出土遺物（五鈴鏡）

8. 大塚古墳（竜丘単位群）



墳丘測量図・推定復元図

大塚古墳・兼清塚古墳（竜丘単位群）



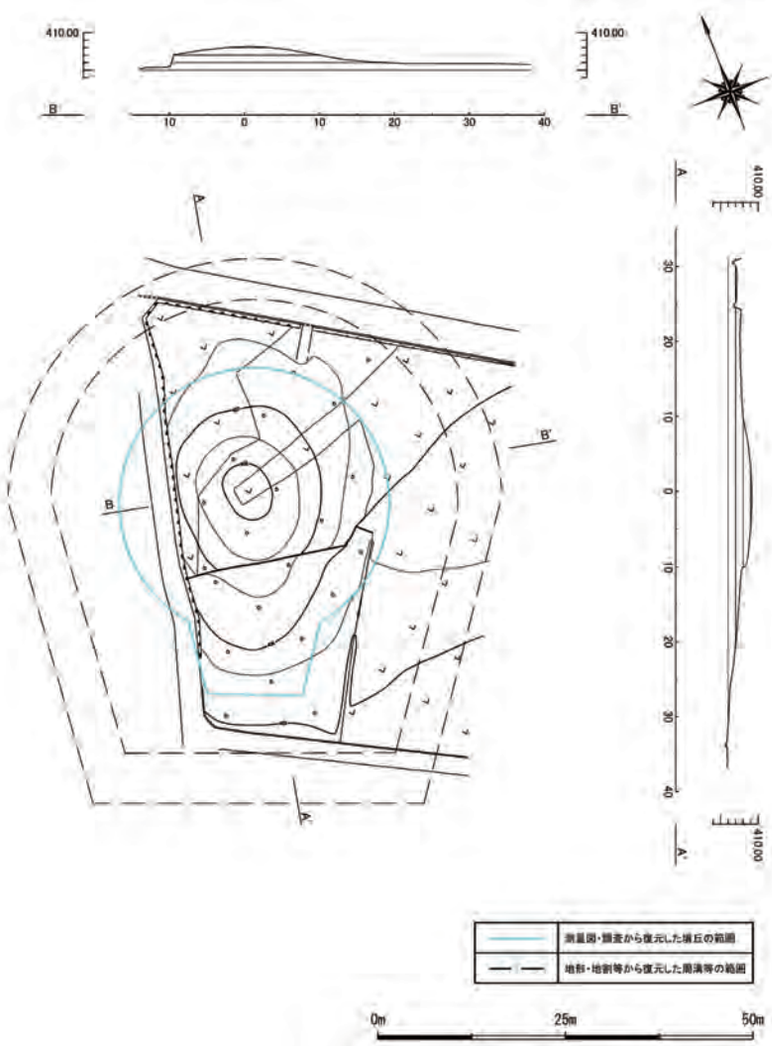
大塚古墳（上）・兼清塚古墳（下）墳丘測量図

9. 鏡塚古墳（竜丘単位群）

所　在　地	飯田市竜丘桐林	
立　　地	標高405m　　地形区分－下段（D地形）	
墳　　丘	帆立貝形古墳	主軸方向－N19°E 墳丘全長－現状45m　　高さ－約2.5m
	墳丘の西側は一部削平されているが、帆立貝形古墳としての形状は残っている。 『下伊那史』（文①）には、本古墳からは鏡が出土したとされ、墳丘上には石室のものとみられる大石があったと記述されており、また、南側にある鎧塚古墳とは、墳丘規模は同程度であるが、墳丘は低いことから、墳丘上部は削平されている可能性が高い。	
墳丘外表	葺石	墳丘西側の調査により確認している（文②）。
	埴輪	埴輪が出土しており、墳丘西側の調査で埴輪列の一部を確認している（文②）。 ○円筒埴輪・形象埴輪片（文②）
埋葬施設	竪穴式石室 （推定）	『下伊那史』（文①）では墳丘上に大型の石が存在することから、石室の存在が想定される。
	『下伊那史』（文①）の記述では、墳丘上に長さ1.5m内外の大きな石があることから、本古墳の埋葬施設を横穴式石室との推測もあるが、現状では確認できない。	
外部施設	周溝	調査により周溝の一部を確認している（文④）。
	外周区画溝	調査により確認されていないが、過去の地割や航空写真から、周溝の外側を区画する溝（外周区画溝）の存在が想定される。
出土遺物	○鏡・土師器片・須恵器片（文①）	
調査履歴	『下伊那史』第2巻	出土遺物、石室の存在
	1967年度	墳丘西側（桐林2888-2）の発掘調査で葺石・埴輪列を確認（文②）
	1974年度	墳丘西側（桐林2881-3）の発掘調査で周溝を確認（文④）
	2000年度	墳丘測量調査実施
築造時期	古墳時代中期（5世紀後半）	
特記事項	●鏡塚古墳は、塚原二子塚古墳、鎧塚古墳とともに塚原古墳群を構成する古墳の一つで、特に鎧塚古墳とは規模、主軸方向ともに共通性があり、古墳の配置からみても連続して築造されたと考えられる。	
	●『下伊那史』（文①）では円墳とされていたが、墳丘測量調査で帆立貝形古墳であることを確認した（文⑤）。	
	●墳丘西側の調査（文④）で、一部であるが周溝を確認している。全体としては、過去の地割や航空写真から周溝は全周すると推定される。また、外周区画溝については調査では確認されていないが、地割や航空写真等では周堤帯とみられる地割が確認できることから、復元図では周堤帯の範囲を示した。	
	●『下伊那史』（文①）では鏡が出土したとされるが、現時点では埋葬施設は明確ではない。しかし、同じく塚原古墳群に属する帆立貝形古墳である鎧塚古墳、塚原3号古墳や前方後円墳の塚原二子塚古墳との比較から、竪穴系の埋葬施設である可能性が高いと考える。	
主要文献	①　下伊那誌編纂会　1955　『下伊那史』第2巻･同第3巻	
	②　飯田市教育委員会　1967　『鏡塚発掘調査報告書』	
	③　滝沢誠他　1988　「飯田市南部における古墳の実測調査」『信濃』第40巻第12号	
	④　下伊那誌編纂会　1991　『下伊那史』第1巻	
	⑤　飯田市教育委員会　2007　『飯田における古墳の出現と展開』	
	⑥　飯田市教育委員会　2012　『飯田古墳群』	
	⑦　田中裕　2013　「伊那谷の埴輪とその系譜」『飯田古墳群－論考編－』飯田市教育委員会	

9. 鏡塚古墳（竜丘単位群）

古墳全景（北東側より）



墳丘測量図・推定復元図

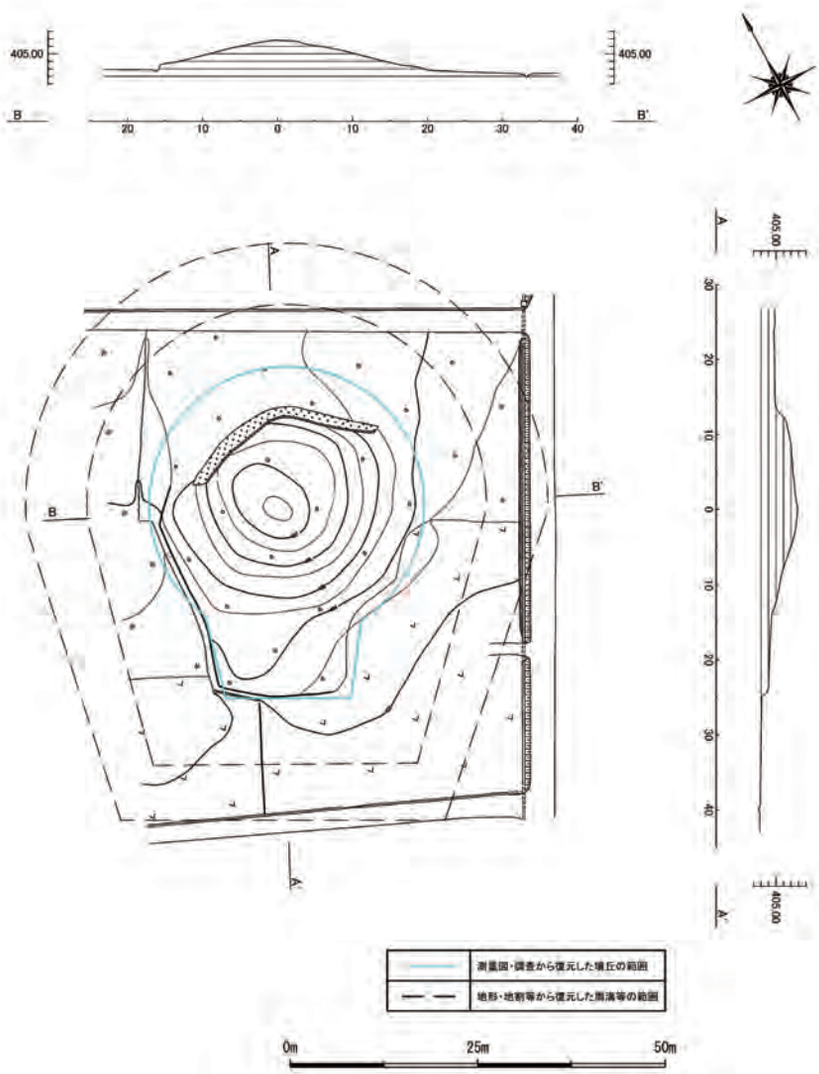
10. 鎧塚古墳（竜丘単位群）

所　在　地	飯田市竜丘桐林	
立　　地	標高405m　　地形区分－下段（D地形）	
墳　　丘	帆立貝形古墳	主軸方向－N39°E 墳丘全長－現状40m（推定45m）　　高さ－3.8m
	墳丘北側は一部削平されているが、帆立貝形古墳としての形状は残っている。 『下伊那史』（文①）では、本古墳から鏡・短甲・馬具等が出土したとされ、墳裾に巡らされた石積は竪穴式石室の用材を使ったものとされている。このことから、墳丘上部は削平されているとみられる。	
墳丘外表	葺石	未調査
	埴輪	埴輪は出土しているが、配置は確認できない。 ○円筒埴輪・朝顔形埴輪（表採）
埋葬施設	竪穴式石室（推定）	『下伊那史』（文①）には、墳裾に巡らされた石積は竪穴式石室の用材を転用したものとの伝えがあると記されている。
	『下伊那史』（文①）の記述では埋葬施設は竪穴式石室で、石室用材が石垣に転用されたとしているが、現状では石室の存在は確認できない。	
外部施設	周溝	未調査
	外周区画溝	調査により確認されていないが、過去の地割や航空写真から、周溝の外側を区画する溝（外周区画溝）の存在が想定される。
出土遺物	○直刀・横矧板鋲留短甲・馬鐸・四獣鏡（文①）	
調査履歴	『下伊那史』第2巻	出土遺物
	1987年	墳丘測量調査実施
	2000年	墳丘南側（桐林2839）で立会調査を実施、鎧塚古墳に関する遺構なし
	2005年度	墳丘西側（桐林2876）で立会調査を実施、周溝等遺構は未確認
築造時期	古墳時代中期（5世紀後半）	
特記事項	●鎧塚古墳は、塚原二子塚古墳、鏡塚古墳とともに塚原古墳群を構成する古墳の一つで、特に鏡塚古墳とは規模、主軸方向ともに共通性があり、古墳の配置からみても連続して築造されたと考えられる。	
	●『下伊那史』（文①）では円墳とされていたが、墳丘測量調査で帆立貝形古墳であることを確認した（文③）。	
	●調査により周溝を確認していないが、過去の地割や航空写真から周溝は全周すると推定される。また、外周区画溝については調査で確認されていないが、地割や航空写真等では周堤帯とみられる地割が確認できることから、復元図では想定される周堤帯の範囲を示した。	
	●『下伊那史』（文①）では横矧板鋲留短甲・馬鐸等が出土したとされるが、現時点で埋葬施設は明確ではない。しかし、同じく塚原古墳群に属する帆立貝形古墳である鏡塚古墳、塚原3号古墳や前方後円墳の塚原二子塚古墳との比較から、竪穴系の埋葬施設である可能性が高いと考える。	
主要文献	①　下伊那誌編纂会　1955　『下伊那史』第2巻･同第3巻	
	②　松尾昌彦　1985　「信濃の馬具」『東日本における古墳時代遺跡・遺物の基礎的研究』	
	③　滝沢誠他　1988　「飯田市南部における古墳の実測調査」『信濃』第40巻第12号	
	④　片山祐介　2000　「飯田市美術博物館所蔵甲冑について」『飯田市美術博物館紀要』10	
	⑤　飯田市教育委員会　2007　『飯田における古墳の出現と展開』	
	⑥　飯田市教育委員会　2012　『飯田古墳群』	
	⑦　田中裕　2013　「伊那谷の埴輪とその系譜」『飯田古墳群－論考編－』飯田市教育委員会	

10. 鎧塚古墳（竜丘単位群）

古墳全景（南東側より）

出土遺物（横矧板鋲留短甲）



墳丘測量図・推定復元図

11. 塚原二子塚古墳（竜丘単位群）

所　在　地	飯田市竜丘桐林	
立　　地	標高405m　　地形区分－下段（D地形）	
墳　　丘	前方後円墳	主軸方向－N29°E 墳丘全長－73m　　高さ－後円部6.2～7.6m・前方部6.0～7.4m
	範囲確認調査で墳裾の葺石を確認しており、平面的には本来の形状が残っている。しかし、墳丘上部は耕作等により改変を受けている。特に、前方部に顕著にみられる段は耕作によるもので、本来の古墳の段築を示すものではない。	
墳丘外表	葺石	範囲確認調査により確認した（文⑥）。
	埴輪	昭和30年代には埋設された埴輪列が確認できた（文②）。しかし、調査では埴輪は数多く出土しているが、配置は確認できない。 ○円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪片（蓋・甲冑・盾）・人物埴輪片・馬形埴輪片他（文⑤⑥）
埋葬施設	竪穴式石室（推定）	後円部墳頂部に天井石の一部とみられる大型の石材が残る。また、地中レーダー探査の結果から、竪穴式石室の可能性が高い（文⑧）。
	『下伊那史』（文①）では埋葬施設の存在を示す痕跡等についての記述はないが、古墳の規模等から竪穴式石室としている。 地中レーダー探査では、後円部中央で埋葬施設とみられる反応が確認できる（文⑧）。	
外部施設	周溝	範囲確認調査により確認、周溝埋土からは転落した埴輪片が多数出土した（文⑥）。
	外周区画溝	後円部北側の調査で周溝の外側を区画する溝（外周区画溝）を確認、前方部側は未確認である（文⑥）。
出土遺物	○冑・土師器片・須恵器片（文①）	
調査履歴	『下伊那史』第2巻	出土遺物
	1957年	くびれ部付近耕作時に埴輪列出土（文②）
	1980年	墳丘測量調査実施
	1990年度	後円部北側（桐林2798-2他）の発掘調査で周溝及び外周区画溝を確認（記録保存）（文⑤）
	2007～2009年度	範囲確認調査(桐林3040他）で葺石及び周溝を確認（現地保存）（文⑥）
	2012年度	地中レーダー探査実施（文⑧）
	2018年度	墳丘細部測量調査実施
築造時期	古墳時代中期（5世紀末）	
特記事項	●塚原二子塚古墳は塚原古墳群に属する古墳で、同古墳群内唯一の前方後円墳である。範囲確認調査で70mを超す墳丘規模であることを確認した（文⑥）。外周区画溝の存在は、高岡第1号古墳、上溝天神塚古墳、御猿堂古墳と共通する。	
	●埴輪の配置は確認できていないが、円筒埴輪や朝顔形埴輪や多種類の形象埴輪が出土している。円筒埴輪には黒斑がないことから、窯焼成によるものとみられる。	
	●16基の古墳で構成される塚原古墳群は、多くが削平されているが、前方後円墳の塚原二子塚古墳と3基の帆立貝形古墳は比較的良好に残る。古墳群がある一帯では、5世紀には大塚古墳（兼清塚古墳・丸山古墳）から塚原二子塚古墳へ、さらに6世紀になると金山二子塚古墳、御猿堂古墳、馬背塚古墳へと前方後円墳が連続して築造される。	
主要文献	①　下伊那誌編纂会　1955　『下伊那史』第2巻･同第3巻	
	②　伊那史学会　1957　「口絵解説」『伊那』5月号	
	③　設楽博己他　1981　「下伊那地方における前方後円墳の実態」『信濃』第33巻第10号	
	④　長野県史刊行会　1983　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（南信)』全1巻（3）	
	⑤　飯田市教育委員会　2007　『飯田における古墳の出現と展開』	
	⑥　飯田市教育委員会　2012　『飯田古墳群』	
	⑦　田中裕　2013　「伊那谷の埴輪とその系譜」『飯田古墳群－論考編－』飯田市教育委員会	
	⑧　飯田市教育委員会　2016　『飯田古墳群範囲確認調査・緊急発掘調査報告書－平成22年度～26年度－』	

11. 塚原二子塚古墳（竜丘単位群）

古墳全景（西側より）

後円部北側周溝の調査状況（東側より）
（1990年度調査）

西側くびれ部の調査状況（西側より）
（2009年度調査）

円筒埴輪

形象埴輪（蓋）

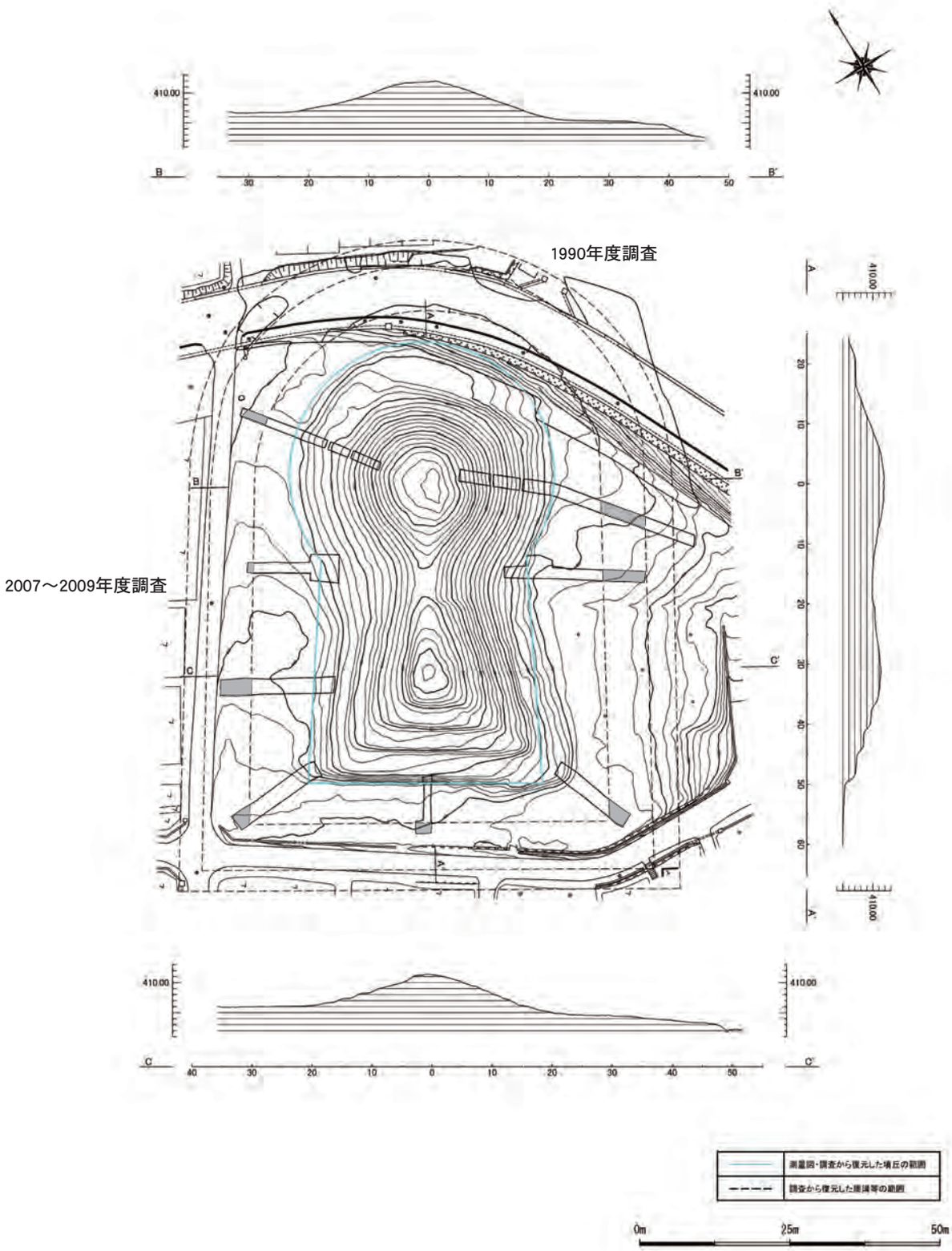
形象埴輪（馬・甲・冑）

11. 塚原二子塚古墳（竜丘単位群）

塚原二子塚古墳全景（南西側上空より）

塚原古墳群全景（南西側上空より）　2019年撮影

11. 塚原二子塚古墳（竜丘単位群）



墳丘測量図・推定復元図

12. 馬背塚古墳（竜丘単位群）

所在地	飯田市竜丘上川路	
立地	標高420m　地形区分－下段（D地形）	
墳丘	前方後円墳	主軸方向－N54°W 墳丘全長－現状46.4m（推定50m台）　高さ－後円部6m・前方部5m
	墳丘の北西側を後円部とする前方後円墳である。墳丘の北側側面が削平されているほか、前方部前端部も大きく削平され、見かけの墳丘規模は本来の規模よりも小さくなっている。	
墳丘外表	葺石	前方部南東側の調査で確認した（文⑦）。
	埴輪	調査で確認されず、表採資料としても確認されていないことから、埴輪を伴わない可能性が高い。
埋葬施設	後円部 横穴式石室	主軸方向－N46°E　石室全長－11.7m　玄室－長さ8.4m×幅1.8～2.1m×高さ1.4～約2.7m
		後円部墳丘基底部に開口する無袖式横穴式石室である。
	前方部 横穴式石室	主軸方向－N31°E　石室全長－約11.9m　玄室－長さ6.4m×幅3.3m×高さ3.3m 羨道－長さ5.5m×幅2.0m×高さ1.6m
		前方部墳丘基底部に開口する畿内系両袖式横穴式石室である。
	後円部、前方部いずれの横穴式石室も比較的良好に残る。ただし、石室が開口していることにより、入口は改変を受けている。後円部の石室は、天井石や側壁の一部に歪みが認められる。前方部の石室は、崩落した入口の天井石を積み直している。	
外部施設	周溝	前方部南東側の調査で確認した（文⑦）。
	外周区画溝	前方部南東側の調査で確認された溝が、周溝の外側を巡る可能性がある（文⑦）。
出土遺物	○土師器片・須恵器片（文⑦）	
調査履歴	『下伊那史』第2巻	前方後円墳、2つの横穴式石室の存在
	1983・1984年	横穴式石室実測調査実施
	1999年度	墳丘測量調査実施
	2014年度	前方部南東側（上川路288-1）で範囲確認調査実施、葺石・周溝を確認（文⑦）
	2015年度	前方部南東側（上川路287他）で緊急発掘調査実施、周溝の外側を巡る溝を確認（文⑧）
築造時期	古墳時代後期（6世紀末）	
特記事項	●前方部南東側の調査で確認した前端部の葺石から、本来の墳丘規模は50mを超える可能性が高い（文⑦）。	
	●前方部南東側で確認した周溝の外側を巡る溝（文⑧）を、他の古墳でも確認されているような周溝の外側を区画する溝（外周区画溝）と考えることもできるが、溝の方向や墳丘との位置関係も考慮して性格を検討する必要がある。	
	●後円部と前方部それぞれに横穴式石室がある。後円部は無袖式横穴式石室、前方部は畿内系両袖式横穴式石室であり、構造が異なる。後円部の石室は上溝天神塚古墳・御猿堂古墳と共通し、前方部の石室はおかん塚古墳（後円部石室）・塚越1号古墳と共通する。	
	●出土遺物は未確認であるが、石室の構造から飯田古墳群の中では最後に築造された前方後円墳と考えられる。	
主要文献	①　下伊那誌編纂会　1955　『下伊那史』第2巻・同第3巻	
	②　長野県史刊行会　1983　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（南信）』全1巻（3）	
	③　白石太一郎　1988　「伊那谷の横穴式石室」『信濃』第40巻第7号・同第8号	
	④　飯田市教育委員会　2007　『飯田における古墳の出現と展開』	
	⑤　飯田市教育委員会　2012　『飯田古墳群』	
	⑥　土生田純之　2013　「伊那谷における横穴式石室の一考察」『飯田古墳群－論考編－』飯田市教育委員会	
	⑦　飯田市教育委員会　2016　『飯田古墳群範囲確認調査・緊急発掘調査報告書－平成22年度～26年度－』	
	⑧　飯田市教育委員会　2019　『上の坊遺跡　馬背塚古墳』	

12. 馬背塚古墳（竜丘単位群）

古墳全景（南西側より）

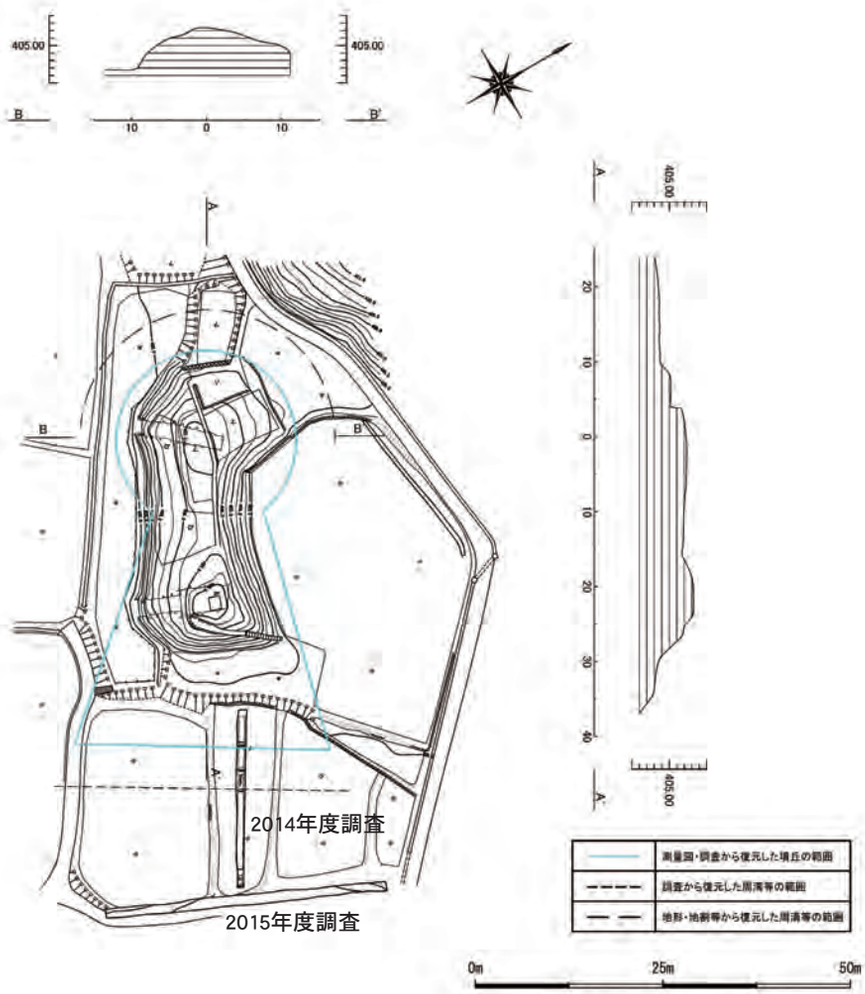
横穴式石室（後円部）

横穴式石室（前方部）

12. 馬背塚古墳（竜丘単位群）

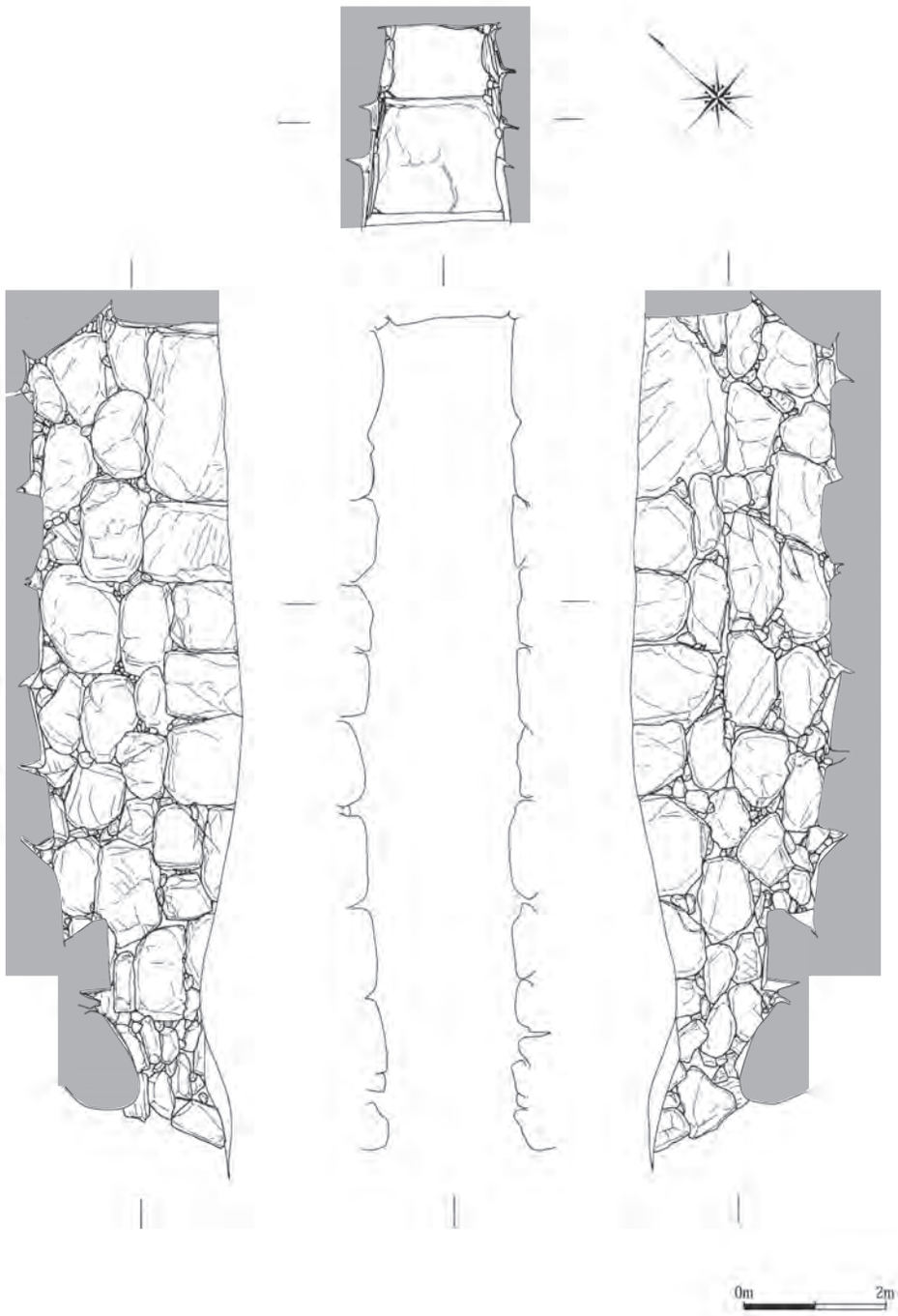
前方部前端部の葺石・周溝（南東側より）
（2014年度調査）

前方部南東側の溝跡（南西側より）
（2015年度調査）



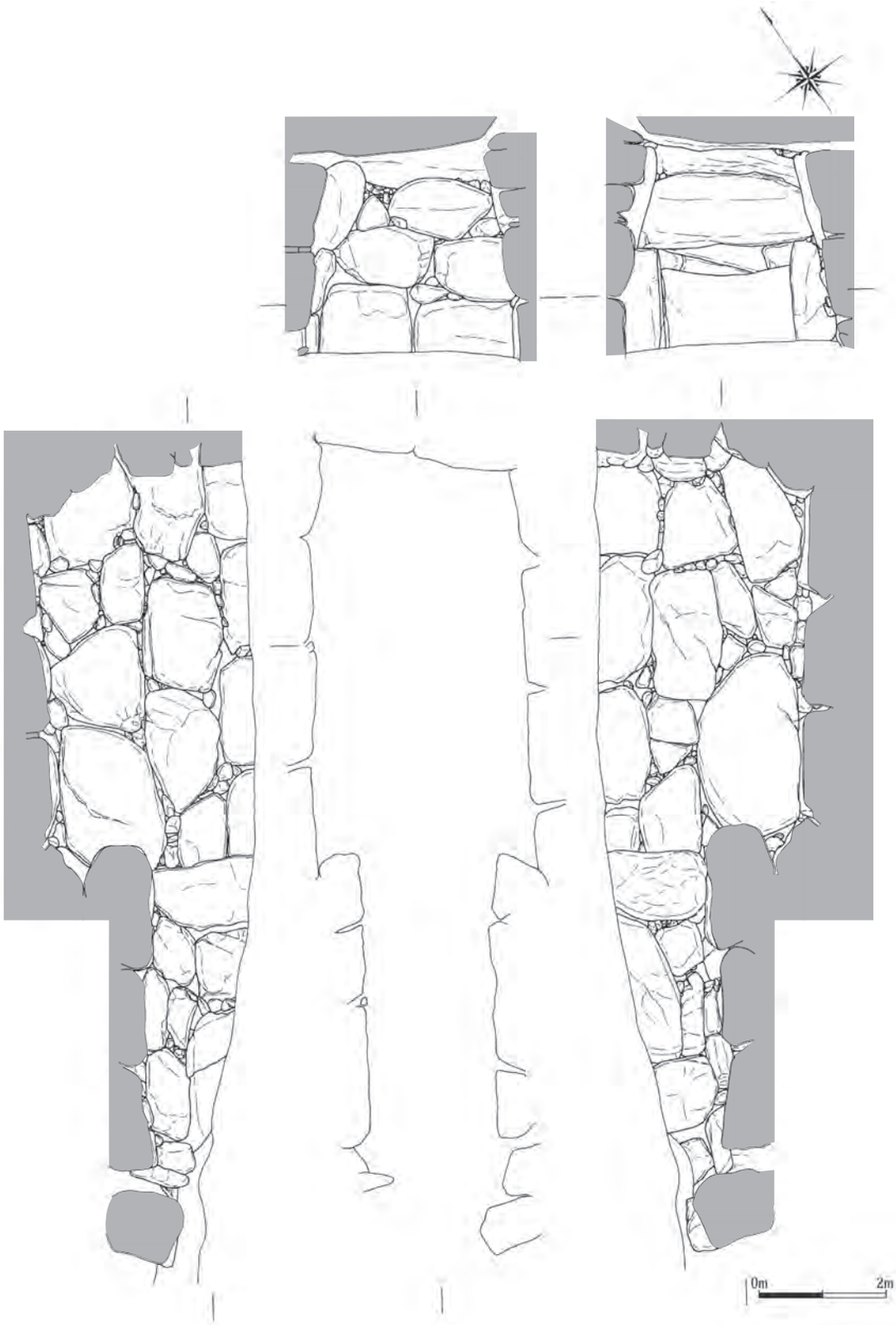
墳丘測量図・推定復元図

12. 馬背塚古墳（竜丘単位群）



横穴式石室（後円部）実測図

12. 馬背塚古墳（竜丘単位群）



横穴式石室（前方部）実測図

馬背塚古墳・御猿堂古墳（竜丘単位群）

馬背塚古墳全景（南西側上空より）　1998年撮影

御猿堂古墳全景（南側上空より）　1994年撮影

13. 御猿堂古墳（竜丘単位群）

所在地	飯田市竜丘上川路	
立地	標高390m　地形区分－下段（D地形）	
墳丘	前方後円墳	主軸方向－N116°E 墳丘全長－約65.4m　高さ－後円部8.5m・前方部9m
	墳丘は墳頂部を中心に改変が著しい。後円部及び前方部の墳丘斜面や墳裾には、盛り土の崩落を防ぐために石積が巡らされている。石積の用材として、葺石が用いられた可能性がある。	
墳丘外表	葺石	墳丘表面に葺石とみられる石が確認できる。
	埴輪	○円筒埴輪・形象埴輪片（靫・盾）・人物埴輪片（盾持ち人）（表採・文①⑤） ○円筒埴輪・形象埴輪片（大刀）・人物埴輪頭部（2015年度調査・文⑩⑪）
埋葬施設	横穴式石室	主軸方向－N29°E　石室全長－13.01m　玄室－長さ10.26m×幅2.35～1.76m×高さ2.9m 羨道－長さ2.75m×幅1.5m×高さ0.6m
		後円部墳丘中腹に開口する無袖式横穴式石室で、赤彩痕跡がわずかに残る。
	横穴式石室は良好に残るが、土砂が流入している。入口の天井石は、打ち欠いて一部が運び出されている。	
外部施設	周溝	前方部南側の調査で周溝を確認、周溝内から埴輪が出土している（文⑩⑪）。
	外周区画溝	前方部北側の調査で外周を区画する溝（外周区画溝）を確認、埴輪出土により周堤帯への配置の可能性がある。前方部南側の調査では、外周区画溝に相当する溝は確認されていない（文⑩）。
出土遺物	○鉄刀片・鉄剣片・鉄製環頭柄頭・龍・鳳凰柄頭・鞘尻・鞘金具・挂甲小札・鉄鏃片・轡・雲珠・杏葉他・画文帯四仏四獣鏡（重要文化財）・鏡残欠（盤龍鏡か）・金環・切子玉・勾玉・管玉・大鈴・純金薄板・土師器片・須恵器片（文①） ○須恵器片（2015年度調査・文⑩）	
調査履歴	下伊那史第2巻	墳丘及び石室の改変の経緯、出土遺物
	1983･1984年	墳丘測量調査実施
	1987年	墳丘測量調査・横穴式石室実測調査実施
	2005年度	前方部北側（上川路932-1）の範囲確認調査で外周区画溝を確認、埴輪出土
	2015年度	前方部南側（上川路957-6）の範囲確認調査で周溝を確認、埴輪出土（文⑩）
築造時期	古墳時代後期（6世紀中葉）	
特記事項	●前方部が細長い墳丘形状は、高岡第1号古墳・飯沼天神塚（雲彩寺）古墳と共通する。	
	●周溝及び外周区画溝を有する。外周区画溝の埋土からも埴輪が出土しており、周堤帯への埴輪配置が想定される。周堤帯への埴輪配置は、高岡第1号古墳でも認められる。	
	●横穴式石室の構造は、上溝天神塚古墳・馬背塚古墳（後円部石室）と共通する。	
主要文献	①　下伊那誌編纂会　1955　『下伊那史』第2巻･同第3巻	
	②　長野県史刊行会　1983　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（南信）』全1巻（3）	
	③　松尾昌彦　1983　「下伊那地方における馬具の一様相」『長野県考古学会誌』45	
	④　白石太一郎　1988　「伊那谷の横穴式石室」『信濃』第40巻第7号･同第8号	
	⑤　滝沢誠他　1988　「飯田市南部における古墳の実測調査」『信濃』第40巻第12号	
	⑥　飯田市教育委員会　2007　『飯田における古墳の出現と展開』	
	⑦　飯田市教育委員会　2012　『飯田古墳群』	
	⑧　土生田純之　2013　「伊那谷における横穴式石室の一考察」『飯田古墳群－論考編－』飯田市教育委員会	
	⑨　田中裕　2013　「伊那谷の埴輪とその系譜」『飯田古墳群－論考編－』飯田市教育委員会	
	⑩　飯田市教育委員会　2019　『飯田古墳群範囲確認調査・緊急発掘調査報告書－平成27年度～29年度－』	
	⑪　春日宇光　2019　「御猿堂古墳の埴輪とその系譜」『伊那』6月号	

13. 御猿堂古墳（竜丘単位群）

古墳近景（北西側より）

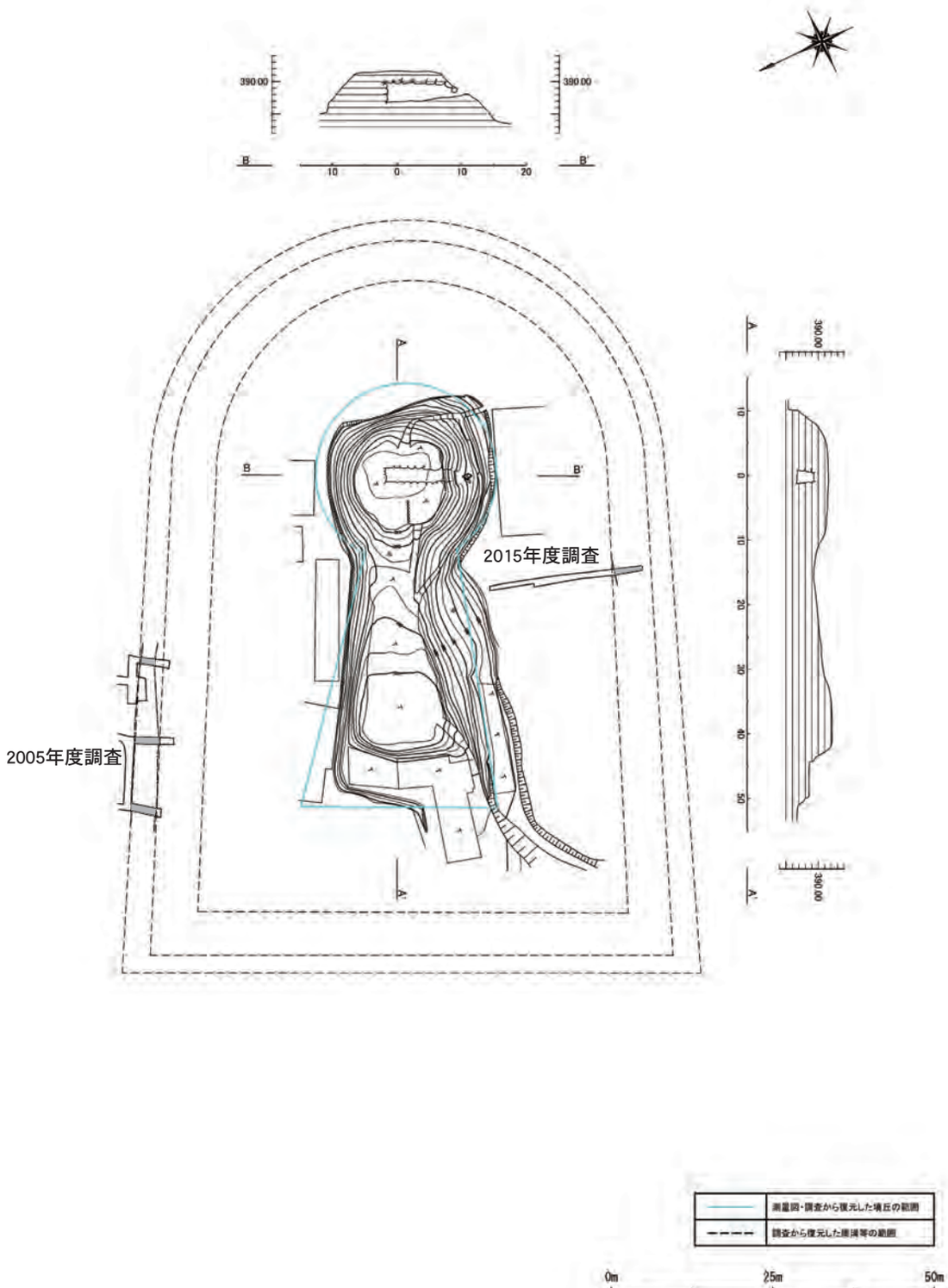
横穴式石室

出土遺物
（重要文化財　画文帯四仏四獣鏡）

形象埴輪（大刀）

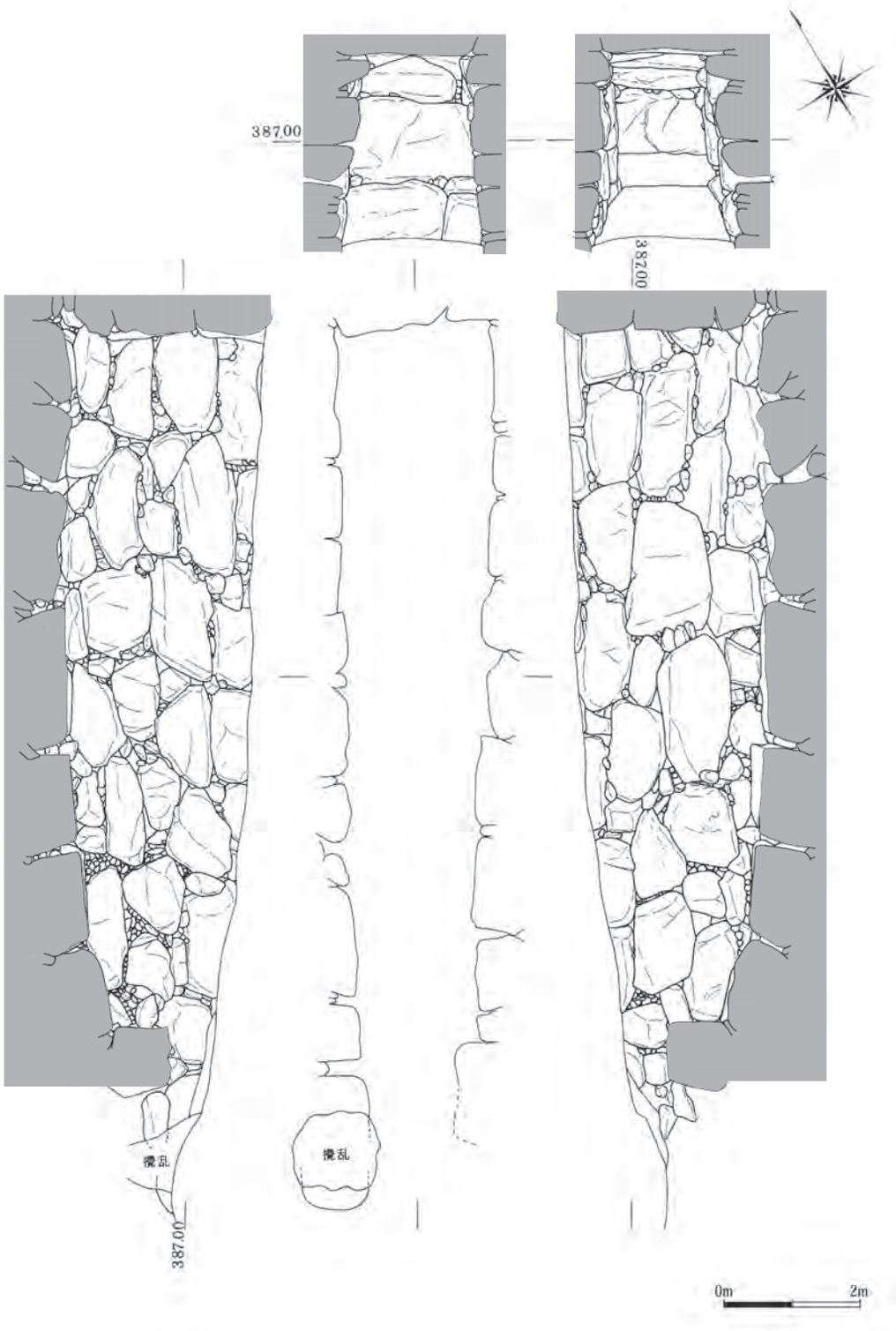
人物埴輪

13. 御猿堂古墳（竜丘単位群）



墳丘測量図・推定復元図

13. 御猿堂古墳（竜丘単位群）



横穴式石室実測図

史跡飯田古墳群保存活用計画

令和２（２０２０）年３月 発 行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯 田 市 教 育 委 員 会

印　　刷　龍 共 印 刷 株 式 会 社